

古文の基礎

古文の基礎

東京学芸大学教授 宮腰賢 著



と、注意すべきことが、見やすくわかりやすく整理され、解説され、必ずです。「授業中心」の古文学習に、力強いお手伝いができるものと確信しております。

古典の世界は、深く豊かで楽しいものです。幾世代にもわたって勇気を与え続けてきた多くの作品があります。そのような世界に、（註）々を慰め励まし、生きる役立ってくれたら、これに過ぎる喜びはありません。（註）にむ入門書として、本書が

終わりに、本書をなすに当たって、高校での多年の経験を惜しみなくお出しくださり、本書の執筆にお力をお貸しくくださった岩井堯彦・国広功・立平幾三郎・西川朝彦の諸先生に心からお礼申しあげます。また、索引作りに校正に日夜お骨折りくださった旺文社の編集担当の方々にも感謝申しあげます。

昭和五十三年二月

本書は刊行以来、広く迎えられて、幸いに版を重ねることができました。この度、高等学校教育課程改訂にあわせて全巻を見渡し、これまでのよさを生かしながら、より教科書に即応した、身近な日常学習書にいたしました。これまで以上にお役に立つものになったと存じます。今回は石井正己先生にお手伝いいただきました。記してお礼申しあげます。

昭和五十八年十月

は し が き

いま本書を手に行っているキミは、古文学習を始めるに当たって、よい道案内になる参考書がほしいと思っているのではありませんか。あるいは、すでに何週間かの古文学習を経験してみても、予習や復習の親切な相談役になる参考書はないかなあと思ったのでしょうか。

古文学習の最も充実した時間は、日々の教室での授業時間です。キミの目の前に先生がいて、古文を読み、解釈し、鑑賞をすすめてくださる。ひとりひとりの生徒諸君の実力を十分に知り、どこがわかり、どこがわからないのか、生徒諸君の生きた表情からの確に判断して、緩急自在に進度を調整してくださる——このような血の通った、手作りの古文学習に勝るものは、残念ながら、そうそうあるものではありません。入門期には、とくに貴重なものである授業時間を十分に活用しなければなりません。

本書は、「授業中心」の古文学習のお手伝いをするということを目標として、その目標に徹して書きあげたものです。「授業中心」の古文学習の効果をあげるには、授業に臨む前に本文をじっくり読んでおかなければなりませんし、授業を受けた後に重要事項を整理しておかなければなりません。本書では、さまざまな工夫を凝らして、予習・復習のポイントが的確につかめるようにしてあります。

キミ自身の力で古文が読めるようになる——その基礎的な読解力を確実に身につけるにはどうしたらよいのか、本書のどのページでもよいですから、開いて見てください。覚えておくべきこ

目次

入門編 古文学習の初歩

はし が き
この本の構成と利用のしかた

第一章 古文と現代文との違い

【例文一】 雀の恩返し 〈宇治拾遺物語〉
今は昔、春つきた、日うららかなりけるに、
古文を音読し、現代文と読み比べる

一 仮名遣いと読み

仮名の種類 一六
古文の読み方 一九

二 語

(1) 現代語と意味の異なる語 二〇
(2) 現代語と紛れやすい語 二二
(3) 似かよった意味をもつ語 二三
(4) 古文特有の重要語 二三

三 文

(1) 動詞 二五

第二章 古文解釈の基礎

【例文二】 身よりあまる思い 〈大和物語〉
桂の皇女に、式部卿の宮住みたまひける時、
敬語に注意して読む

一 敬語法の基礎

尊敬 二六
謙譲 二八
丁寧 三〇

二 和歌の解釈の基礎

(1) 掛詞 三三
(2) 縁語 三四
(3) 序詞 三五
(4) 体言止め 三六

(1) 形容詞・形容動詞 二一
(2) 助動詞 二二
(3) 助詞 二三

例題研究編 古文学習の実際

第一章 説話文学

〔一〕 児のそら寝

今は昔、比叡の山に児ありけり。

〈宇治拾遺物語〉……

四

〔二〕 馬盗人

〔1〕

今は昔、河内の前司、源頼信朝臣といふ

〈今昔物語集〉……

五

〔三〕 馬盗人

〔2〕

また頼義も、その声を聞きて、

〈今昔物語集〉……

五

練習問題

第二章 物語文学

〔四〕 かぐや姫の生い立ち

〈竹取物語〉……

六

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。

〔五〕 かぐや姫の昇天

〔1〕

かかるほどに、よひうち過ぎて、

〈竹取物語〉……

七

〔六〕 かぐや姫の昇天

〔2〕

竹取、心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、

〈竹取物語〉……

八

〔七〕 かぐや姫の昇天

〔3〕

天人の中に持たせたる箱あり。

〈竹取物語〉……

九

〔八〕 東下り

〔1〕

昔、男ありけり。その男、身をえうなき者に

〈伊勢物語〉……

十

- 1 男の境遇と旅の心の変化を考える
- 2 省略の表現
- 3 助動詞「たり・り」の意味・用法

- 1 人間界と天界との描写の違いを指摘する
- 2 敬語の特殊用法
- 3 助動詞「す・さす」の意味・用法

- 1 かぐや姫の心情の推移について考える
- 2 連体形の用法
- 3 副助詞「だに」の用法

- 1 描写の特徴について考える
- 2 敬語の種類と用法
- 3 副詞の呼応

- 1 かぐや姫の超人間的な性格を考える
- 2 主語・述語の関係
- 3 「ば」の用法

【九】東下り〔2〕 〈伊勢物語〉…… 六

なほ行き行きて、武蔵国と下総国との中に、

1 歌物語の特質について考える

2 格助詞「の」の用法

3 係り結びの「結び」の省略

【一〇】簡井簡 〈伊勢物語〉…… 一〇〇

昔、田舎わたらひしける人の子供、

1 二人の女の性格を比較する

2 指示語

3 「やは」の用法

【一一】若紫〔1〕 〈源氏物語〉…… 一〇八

日もいと長きに、つれづれなれば、

1 少女の愛らしさの効果的な表現を指摘する

2 補助動詞の用法

3 不安・懸念の表現「もぞ・もこそ」

【一二】若紫〔2〕 〈源氏物語〉…… 一二五

尼君、髪をかきなでつつ、

1 源氏の心の動きをたどる

2 感動の表現

3 主語（動作主）の判定

【一三】弓争ひ 〈大鏡〉…… 一三

帥殿の、南の院にて、人々集めて弓遊ばししに、

1 登場人物の関係・時代的背景を調べ、道長と

伊周の性格を考える

2 二方面への敬語
3 「させ」の識別

【一四】祇園精舎 〈平家物語〉…… 一三六

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。

1 文章を味わい、『平家物語』の中心となる思想

2 小段落に分け、構成を考える

3 『平家物語』の文体の特色

【一五】忠度の都落ち〔1〕 〈平家物語〉…… 一四〇

薩摩守忠度は、いづくよりや帰られたりけん、

1 忠度の心情をまとめる

2 仮定条件を表す条件句

3 中世語法の特徴

【一六】忠度の都落ち〔2〕 〈平家物語〉…… 一四〇

三位これを開けて見て、

1 忠度の置かれた立場を考える

2 歌の修辭

3 音便

【一七】木曾の最期〔1〕 〈平家物語〉…… 一四六

木曾左馬頭、その日の装束には、

1 「軍語り」といわれる文章表現の特色を指摘

2 する

登場人物の心理を読みとる

助動詞「けん・らん」、「がな」の意味・用法

【一八】 木曾の最期 [2] 〈平家物語〉……一五
今井四郎、木曾殿、ただ主従二騎になつて

- 1 義仲の心情・態度の変化を説明する
- 2 「候ふ」の用法
- 3 助動詞「ぬ」「つ」の区別

【一九】 木曾の最期 [3] 〈平家物語〉……一五
木曾殿はただ一騎、栗津の松原へ駆けたまふが、

- 1 義仲・兼平両者の最期を読み比べる
- 2 末尾の一文を味わう
- 3 「とも」「ども」「が」「の」の用法

【二〇】 鼠の文使ひ [1] 〈世間胸算用〉……一六
毎年煤払ひは極月十三日に定めて、

- 1 話のおもしろさについて考える
- 2 西鶴の文体の特色
- 3 近世語法の特色

【二二】 鼠の文使ひ [2] 〈世間胸算用〉……一六
おほかた煤もはきしまひて、屋根裏まで

- 1 主題を考える
- 2 西鶴の文体の特色
- 3 近世語法の特色

練習問題 ……一七

第三章 随筆文学 ……一七

【二二】 春はあけぼの 〈枕草子〉……一八

春はあけぼの。やうやう白くなり行く山ぎは

- 1 文体の特徴について調べる（言い切り方）
- 2 助動詞「たり」の意味・用法
- 3 副助詞「さへ」の用法

【二三】 すさまじきもの [1] 〈枕草子〉……一八
すさまじきもの。昼はゆる犬。春の網代。

- 1 「昼はゆる犬」はなぜ「すさまじ」なのか考
える
- 2 指示語
- 3 助動詞「なり」の識別

【二四】 すさまじきもの [2] 〈枕草子〉……一八
除目に司得ぬ人の家。ことしはかならずと

- 1 任官予定者を取り巻く人々の心理を考える
- 2 副詞の用法
- 3 係り結びの「結び」の省略・流れ

【二五】 くらげの骨 〈枕草子〉……二〇
中納言参りたまひて、御扇奉らせたまふに、

- 1 献上した扇とは別の扇をことさら話題にし、
自賛した中納言の気持ちを考える
- 2 二方面への敬語

【二六】 山里・前栽・御簾の内 〈枕草子〉……二〇
五月ばかりなどに山里にありく、

九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の、
雪のいと高う降りたるを、例ならず

- 1 三章段の話題の共通点を考える
2 「九月ばかり……」の主題を考える
3 敬語の用法

【二七】 ゆく川の流れ 〈方丈記〉…… 三〇

ゆく川の流れは絶えずして、しかも、

- 1 『平家物語』の冒頭文と比較する
2 修辞法

【二八】 飢渴 〈方丈記〉…… 三四

また、養和のころとか、久しくなりておぼえず。

- 1 作者の心情が直接表現されている箇所を指摘する
2 助動詞「き」「けり」の意味・用法
3 「ぬ」の識別

【二九】 飢渴 〈方丈記〉…… 三〇

いとあはれなる事も侍りき。

- 1 例文二八と描写の仕方を比較する
2 「は」の用法

【三〇】 よしなしこと 〈徒然草〉…… 三四

つれづれなるままに、日暮らし、

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、
仁和寺にある法師、年寄るまで、

- 1 「神無月のころ……」の主題を考える
2 省略の表現
3 「けれ」の識別

【三一】 ある人、弓射ることを習ふ〈徒然草〉…… 三〇

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて

- 1 主題を考える
2 助動詞「べし」の意味・用法

【三二】 心なしと見ゆる者 〈徒然草〉…… 三四

心なしと見ゆる者も、よき一言言ふものなり。

- 1 文章構成に注意して主題を考える
2 対偶中止法
3 格助詞「の」「が」の用法

【三三】 花は盛りに、月はくまなき 〈徒然草〉…… 二〇

花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。

- 1 段落ごとの話題を探り、論の進め方の特徴を考える
2 反語表現
3 願望の表現

【三四】 花は盛りに、月はくまなき 〈徒然草〉…… 二六

すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。

- 1 段落ごとの相互関係から、話の展開の仕方をあとづける
2 指示語
3 品詞の転成

第四章 日記・紀行文学

……………二五

【三五】 惜別の門出

〈土佐日記〉……二五

男もする日記といふものを、女もしてみむとて、

1 別離のさまの描かれ方を考える

2 挿入句

3 連用修飾語の用法

【三六】 少女の夢

〈更級日記〉……二六

あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に

1 作者の物語に対する情熱を読みとる

2 文の構造

3 自発の助動詞「る・らる」

【三七】 旅へのいざない

〈おくの細道〉……二六

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人

1 芭蕉の旅行に対する気持ちと、その人生観を

読みとる

2 俳文の特色

【三八】 造化の妙

〈おくの細道〉……二七

そもそもことふりにたれど、松島は扶桑第一の

1 松島を眼前にした芭蕉の気持ちを考える

2 中止法

3 「らる」の識別

【三九】 はかなき人の世

〈おくの細道〉……二八

三代の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里

第五章

和歌

二九

練習問題

二九

【四〇】 悲しみの景

〈おくの細道〉……二九

江山水陸の風光数を尽くして、いま象潟に方寸を

1 松島と比較し、芭蕉の感じ方の違いを考える

2 芭蕉のこの旅に対する態度を考える

3 擬人表現

【四一】 さわらびの萌え出づる春

〈万葉集〉……二九

1 熟田津に船乗りせむと

(額田王)

2 家にあれば筈に盛る飯を

(有間皇子)

3 石はしる垂水の上の

(志貴皇子)

4 淡海の海夕浪千鳥

(柿本人麻呂)

5 み吉野の象山のまの

(山部赤人)

6 瓜食めば子ども思はゆ

(山上憶良)

7 銀も金も玉

()

8 験なきものを思はずは

(大伴旅人)

9 君が行く道の長手を

(狭野弟上娘子)

10 うらうらに照れる春日に

(大伴家持)

11 多摩川にさらす手作り

(東歌)

12 我が妻はいたく恋ひらし

(防人の歌)

【四二】五月待つ花たちばな 〈古今和歌集〉……三九

- 1 歌の中心になる感動を味わう
 2 枕詞・序詞・対句
 3 上代語法

- 1 五月待つ花たちばな (よみ人知らず)
 2 思ひつつ寝ればや人の (小野 小町)
 3 世の中に絶えて桜の (在原業平朝臣)
 4 秋来ぬと目にはさやかに (藤原敏行朝臣)
 5 袖ひちてむすびし水の (紀 貫 之)
 6 ひさかたの光のどけき (紀 友 則)
 7 心あてに折らばや折らむ (凡河内躬恒)
 8 春がすみ立つを見捨てて (伊 勢)
 9 山里は冬ぞさびしき (源宗于朝臣)
 10 月見れば千々にものこそ (大江 千里)

- 1 歌の表現のおもしろさを味わう
 2 文の構造
 3 助動詞「らむ」の意味・用法

【四三】山もとかすむ水無瀬川〈新古今和歌集〉……三四

- 1 見渡せば山もとかすむ (太上 天皇)
 2 春の夜の夢の浮橋 (藤原定家朝臣)
 3 志賀の浦や遠さかゆく (藤原家隆朝臣)
 4 昔思ふ草のいはりの (皇太后宮大夫俊成)
 5 風通ふ寝覚めの袖の (皇太后宮大夫俊成女)
 6 山深み春ともしらぬ (式子内親王)

練習問題 三〇

第六章 俳句・俳論 三三

【四四】夢は枯野をかけめぐる 〈芭蕉の句〉……三四

- 7 玉の緒よ絶えなば絶えぬ (式子内親王)
 8 寂しさはその色としも (寂蓮法師)
 9 心なき身にもあはれは (西行法師)
 10 見渡せば花ももみぢも (藤原定家朝臣)

- 1 歌の感じや気分を味わう
 2 体言止め・本歌取り・縁語
 3 句切れ

- 1 野ざらしを心に風のしむ身かな
 2 海暮れて鴈の声ほのかに白し
 3 古池や蛙飛び込む水の音
 4 くだびれて宿かるころや藤の花
 5 初しぐれ猿も小蓑をほしげなり
 6 塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店
 7 梅が香にのつと日の出る山路かな
 8 菊の香や奈良には古き仏たち
 9 この道や行く人なしに秋の暮れ
 10 旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

- 1 句の情景や用語から、句の感じを味わう
 2 6の句を、其角の次の句と比べる
 声かけて猿の歯白し峰の月

【四五】 岡にのぼれば花いばら

〈蕪村・一茶の句〉……三〇

与謝蕪村

1 ゆく春や重たき琵琶の抱きこころ

2 愁ひつつ岡にのぼれば花いばら

3 鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

4 月天心貧しき町を通りけり

5 漸条として石に日の入る枯野かな

小林一茶

6 めでたさも中くらみなりおらが春

7 涼風の曲がりくねつて来たりけり

8 有明や浅間の霧が膳をはふ

9 これがまあつひの栖か雪五尺

練習問題解答
重要語句索引
重要事項索引

練習問題解答	三六
重要語句索引	三九
重要事項索引	三七

〔著者紹介〕

宮腰 賢(みややし・まさる)

一九三八年(昭和十三年)東京生まれ。東京学芸大学国語科卒業。現在、東京学芸大学助教授。国語学、特に語法・敬語史が専門。「和泉式部日記の国語学的考察」「補助動詞『ゆこゆ』から『まゐらす』への漸移相」など、専門分野の論文が多い。また、『傾向と対策 古典』の著者。他に、『文法全解 去来抄・三冊子』『日本語の探検』などの著書がある。趣味は、サッキづくり、音楽鑑賞など。

【四六】 ふる・ふらぬの論

〈去来抄〉……三六

行く春を近江の人と惜しみけり

2 1 去来の見落としていた一点を考える
倒置表現

【四七】 作者の意図をこえる鑑賞

〈去来抄〉……三〇

岩鼻やここにも一人月の客

2 1 芭蕉の説で句を解釈する
「や」の識別

練習問題

三四

この本の構成と利用のしかた

本書は、入門編「古文学習の初歩」と、例題研究編「古文学習の実際」の二部からなっている。高校一、二年生の古文学習に焦点を絞り、その全分野の学習が体系的に、しかも段階を追ってすめられるように配慮してある。

① 入門編 古文学習の初歩

「古文と現代文との違い」「古文解釈の基礎」の二章からなる。古文を学ぶ意義、古文学習の目標を考え、具体的に古文と現代文とを読み比べて、その違いを、仮名遣い・語・文法の三点で確かめ、古文学習の基本事項を簡潔に整理して示した。いわば、古文学習の第一歩であるとともに、古文学習の全体像を見取図として示すものとなっている。

② 例題研究編 古文学習の実際

ジャンル別に、説話文学、物語文学、随筆文学、日記・紀行文学、和歌、俳句・俳論の六章に分けて、読解力の基礎となる四十七例文を収めた。例文は、教科書を精査し、最も多く採録されている出典箇所を採用した。

◆ジャンルと出典の解説 各章のはじめに、その章で学ぶジャンルの特性、出典、文学史の流れなどについて、簡潔に解説した。学習の要点をとらえるための必須事項に限ってあるので、整理にも役立つはずである。

◆重要語句の表示と訳 例文の本文中に＊印で重要語句を示した。また、各例文の本文のすぐ下に「訳」（韻文は「大意」を置いた。本文と「訳」とを読み比べて基礎的な解釈力を身につけてもらうためである。なお、「訳」の中に（ ）に包んで示したのは補った部分、「（ ）」に包んだのは語釈である。

◆この語句は覚えよう 例文の本文中に＊印をつけた語句は、この欄で解説される。一例文で記憶すべき語句の数は二十を越えないようにし、全巻にわたって調整し配列した。学習量を考慮しての処置である。

◆この語法に注意しよう 各例文で文法上注意しなければならぬ点を指摘し、参照すべきページを示した。ここに指摘された語法は、本書の該当ページの【学習のしるべ】で詳しく解説されている。

◆学習のしるべ 各例文のポイントとなる箇所を設問形式で取りあげた。平均三つずつの課題が用意されているが、

原則としては1は内容読解、2・3は語句・文法課題とした。
うさぎのマークが課題の分類を示している。

●練習問題 各章の終わりに、そのジャンルのまとめを兼ねた練習問題を置いた。問題は応用力の充実をねらうという一面もあるで、やや難しいものも用意した。巻末には全文訳も掲げておいたので十分研究してほしい。

●一行知識 各ページの下に一行知識を置いた。古文の学び方、古文を学ぶうえで役立つことがら、そして、記憶すべきことが楽しく覚えられるように工夫したものである。

●索引 重要語句重・要文法事項の整理に役立つように、詳細な索引を用意した。手まめに索引を利用して、本書の隅から隅まで身につけていただきたい。

本書は、全巻を通して一つのまとまりをなすように工夫した参考書である。重要語句にしても、重要文法事項にしても、学習する際の負担を考慮して、一箇所で集中的に覚えなければならぬということにならないように、全巻にほぼ均等に配分してある。したがって、各例文ごとにはば六ページずつ学ぶことが望ましい。

教科書と併用することが、参考書利用の最も効果的な方法であるが、予習に際しては、本文と「訳」をしつくり読んで、どうしてこんな訳になるのか納得がいくまで考えてみてほしい。本書には、いわゆる語釈の欄はない。「訳」と本文を読み比べて、考えてもらいたいのである。復習に際しては、この語句は覚えよう、この語法に注意しようの欄が威力を発揮するはずである。面倒でも、参照ページを参照し、索引を活用して関連ページを読むようにしてほしい。なお、教科書と併用する場合でも、一例文の一まとまりは読み通すように心がけてもらいたい。

各章ごとに学び終えたら、それまでの知識を確かめ、応用力をつけるために、試験を受けるつもりで練習問題に取り組んでもらいたい。実際にノートに解答を作ってみて、その解答を添削するつもりで巻末の解答と比べてみてほしい。練習問題の数は多くはないが、十分に練った問題が精選してあるから、手ごたえがあるはずである。

入門編

例題研究編

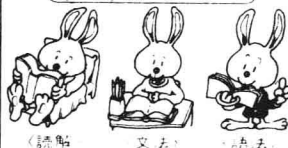
ジャンルの解説

↓
例 文

この語句は覚えよう

この語法に注意しよう

学習のしるべ



↓
練習問題

入門編 古文学習の初歩

中学校での国語の学習で、かなり多くの古文に親しむ機会があった。古文の学習が現代文の学習と異なるのは、どういう点だったろうか。

古文の学習の目標は、古文に親しむことによって、私どもの祖先が何を考え、何に感じたか、どのように新しいものをとらえ、どのように言葉を磨いて、心を豊かにしてきたかを知り、これをどう受け継ぎ、どう生かして進まなければならないかを理解することである。この目標を達成するために、次のような能力を身につけようとする。

- (ア) 登場人物の性格や役割がわかるようになること。
- (イ) 季節や自然描写が味わえるようになること。
- (ウ) 興味ある部分が指摘できるようになること。
- (エ) その文章の主題や要旨がわかるようになること。
- (オ) 感想文が書けるようになること。

教室で古文の学習が進められるときには、「情景や作者の心情を思い描いてみよう」「作者の感動の中心は何か」「どんな感じの歌か」「季節はいつか」「この話のおもしろさはどこにあるか」「あらすじをまとめてみよう」「感想をまとめてみよう」などという設問に答えるというやり方で、それぞれの能力が養われる。

実は、右に掲げた身につけようとする五つの能力も、教室での設問も、現代文での学習と異なる点がない。古文の学習で、現代文の学習と異なる点があるとすれば、次の一点だけなのだ。

- (カ) 現代文を読むのと同じように古文が読みとれるようになること。

なぜ古文が現代文と同じように読めないのだろうか。理由ははっきりしている。日常生活で読みなれている現代文でなく、なじみの薄い古文だからである。

現代文と古文とは、どこが違うのか。

その違いがはっきりすれば、違う点だけを学習すればよい。古文学習の第一歩は、古文をじっくり見つけて現代文と違う点の一つでも多く発見することだ。

第一章 古文と現代文との違い

試みに読み比べてみることにしよう。ここに掲げたのは、おそらく幼いころに一度は聞いたか読んだかしたことがあるはずの「舌切り雀」のお話の原話にあたるものの冒頭の一節である。鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』に収められている。まず、本文を音読し、下の訳と読み比べてくれたまえ。

【例文一】雀の恩返し（発端）

古文を音読し、現代文と読み比べる

今は昔、春つかた、日うららかなりけるに、六十ばかりの女のありけるが、虫うち取りてゐたりけるに、庭に雀のしありきけるを、わらはべ石を取りて打ちたれば、当たりて腰をうち折られにけり。羽をふためかして惑ふほどに、鳥のかけりありきければ、「あな心憂。鳥取りてむ。」とて、この女急ぎ取りて、息しかけなどして物食はす。小桶に入れて、夜は収む。明くれ

【訳】

今ではもう昔の話であるが、春のころ、日がうららかであったときに、六十歳くらいの女がいたというが、その老婆がしゃがみこんで虫（「しらみ」）を取っていたときに、庭に雀がちょこちょこ歩きまわっていたのを、子どもが石を手にしてぶつけたところ、当たって腰をうち折られてしまった。羽をバタバタさせてうろたえているときに、鳥が飛びまわっていたので、「ああ、かわいそうに。鳥が捕まえてしまうだろう。」

ば米食はせ、銅^{あがね}、薬にこそげて食はせなどすれば、子ども・孫など、「あはれ、女刀^{せんとう}自は老いて雀飼^{つぐい}はるる。」とて、憎み笑ふ。

と思つて、この女が急いで捕まえて、息を吹きかけたりして物を食わせる。小さな桶に入れて、夜はしまっておく。夜が明けると米を食わせたり、銅を薬として削って食わせたりすると、子どもや孫などが、「わあ、おばあさんは老いぼれて雀をお飼いになっているよ。」と言つて、冷やかして笑う。

どうだろう。十三世紀初頭に成立したと推測される作品の一節なのだが、古くさい文章だと感じるだろうか。現代文との違いよりも、むしろ共通点の多いことに驚くのではあるまいか。

同じ日本語であるから、そう大きな違いはない。生まれたときから日本語を用いて生活している者にとっては、古文であっても、わけがわからないなどということはない。しかし、一語一語を読み比べてみると、古文と現代文との間にはいろんな違いがあることに気づくことだろう。なんとなくわかるとうのでなく、完全に、わかるという段階にまで進むために、その違いを確かめておこう。

① 仮名遣いの違い

例文の右側につけたカタカナは、現代仮名遣いによるものである。現代仮名遣いでは「惑う」「食わす」と書くところを、古文では「惑ふ」「食はす」と書いてある。振り仮名のためにカタカナが添えられていないが、「こおけ」「おさむ」「おんな」も「こをけ」「をさむ」「をんな」になっている。「ゐたりけるに」のように、見なれない仮名も見える。

これは「歴史的仮名遣い」といわれるもので、平安時代の仮名遣いをもとにしてできたきまりなのである。仮名が発明された当時は、「惑ふ」はマドフ、「食はす」はクフスと発音されて、文字と発音とは対応していたのだが、長い年月の間に発音のほうが変化してしまった。すなわち、「川」はカフ・アと

「惑ふ」はマドフ、「食はす」はクフス、はひふへは——語中語尾ではワイウエオ